

「桃花源記」と「桃花源詩」と

— その関係についての一考察 —

土屋 聡

陶淵明「桃花源記」は高校国語教科書に多く採用される教材であるが、近年、この作品と表裏一体をなす「桃花源詩」を補助的に利用しようとする提案が出されている。しかし、「詩」がどのような形で「記」に関わっているのか、本文に則した検証は未だ充分ではない。そこで、まず清の陶澍注『靖節先生集』十巻のほか、南宋・元の諸本における収録状況を調査し、両者の緊密な関係について確認した。次いで「詩」を中心にしながら、「記」との関連について分析を加えた。その結果、「詩」は推測や想像を交えて桃花源の日常を描くものであり、「記」はその空想の素材という関係が明らかとなった。それは「記」に新しい価値を見出すことでもあり、この点に「桃花源詩」を援用する意義があると結論づけた。

Keywords：陶淵明、「桃花源記」、「桃花源詩」、補助的教材

一. はじめに

陶淵明「桃花源記」は、短編ながら洗練された文章と劇的な展開を持つ教材であり、現行の高等学校国語の教科書に多く採用されている⁽¹⁾。ところで、陶淵明には「桃花源記」とは別に「桃花源詩」という作品も存在する⁽²⁾。本稿では、以下、それぞれ「記」、「詩」と略称する。

教科書では「記」のみが収録され、「詩」を取り上げるものはないが、近年、「記」に対する補助的な教材として「詩」を授業で扱うことを提案する論考が提出されている。

秋山愛「漢文入門教材の一提案—『桃花源記』を使って—」（東京学芸大学国語国文学会『学芸国語国文学』36号、2004年）では、陶淵明の意図や思想を酌みとり、「記」の解釈を助けるものとして、発展的に扱うことが提案されている。

また、吉川創太「高等学校国語教科書における『桃花源記』の教材分析」（長野県国語国文学会『研究紀要』13号、2020年）では、読みの可能性を広げるという点で、「詩」を踏まえた作品理解の必要性が指摘されている。

確かに、実録ふうに記述された「記」と異なり、「詩」が作者陶淵明の考えを示すものとしての性質を持つ

ことは、従来から指摘されてきたことである。上田武「教育課程の改訂と漢文の授業：陶淵明の詩文の読解指導覚え書き・続」（『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』41号、1983年）では、「伝聞の記録の性質をも持つ『記』と、理想郷への想念をうたう『詩』との間に、それぞれ独自性があるのは当然である」としており、また「詩」の性質について次のように指摘している。

「桃花源記」は本来同題の詩の序であるが、詩においては「春蚕収長糸、秋熟靡王税」、あるいは「雖無紀歷志、四時自成歳」などの句によって、桃花源がどういう世界であるかの性格づけがなされている。これらの表現によってみるなら、淵明の意識の中には煩瑣な文明の諸制度も、抑圧や搾取の機構も存在しない、自給自足の村落共同体の構想が、かなりはっきりとした形をとって描かれていたことが推測できる。

また、川合康三『桃源郷 中国の楽園思想』（講談社選書メチエ558、2013年、講談社。p.178）も、「記」と「詩」との相違点を次のように述べる。

「記」は物語の語り手に徹して、作者の意見を差し挟むことはない。それに対して「詩」は作者の判断、意見、個人的な願い、つまりは作

者の主体性が露呈している。詩の作者は全体を把握し、それに作者自身による意味付けを施しているのである。したがって「詩」を通して作者の意図は明白に読みとることができる。

「詩」によって桃花源の世界の「性格づけ」がなされ、作者の「判断、意見、個人的な願い」が表されているとすれば、それを援用して「記」の解釈を深めてゆくことは十分に可能であろう。

しかし、これまでの研究は「詩」の一部を取り上げることによって、作者の思い描く理想社会を推知しようとする方向にあったように思われる。一方、「記」と「詩」との関係については、前述のように両者の性質の違いは指摘されているものの、「詩」がどのような形で「記」の記述を受けとめ、また「詩」に還元しているのか、本文に則した検証は未だ充分とは言えない。

本稿は、こうした反省に基づいて「記」と「詩」との関係性を明らかにし、以て「詩」を補助的教材として援用する意義を提示しようとするものである。

二. テキスト編集から見た「記」と「詩」との関係
「記」と「詩」との関係を検討するに先だって、陶淵明のテキストを確認しておきたい。と言うのも、「記」と「詩」との先後関係については、次のような二通りの考え方があるためである。

本来は独立した文ではなく、詩の序として存在したもので、正しくは桃花源詩并序というべきものである。(中略) 恐らくは当時行われた桃源説話に感じて詩を詠ずるとともに、詩の意を明かにするため、さらに文をつづって詩に冠したものと思われるが、(以下略)

(近藤春雄『中国学芸大事典』1978年、大修館書店。【桃花源記】項、p.583)

「桃花源記」「桃花源詩」が、先行する洞窟探訪説話の延長線上にある作品であることは、既に指摘されているところである⁽³⁾。上記における「桃源説話」も、そうした説話群が想定されていると思われるが、この説明に拠れば、「記」は「詩」の序文であり、「詩」が先にあって、これを説明するために後から「記」が附加されたことになる。

一方、川合氏前掲書(pp.177-178)のように、「記」が先にあって、「詩」は「記」の後を追う形で製作されたものであるとする指摘もある。

全体として「詩」は「記」を祖述している印象があって、「記」が先に書かれ「詩」がそれをもとにあとから書かれたことは確かと思われる。

本稿では清の陶澍注『靖節先生集』十卷(一九五六

年、文学古籍刊行社)を底本とするが、まず、底本における収録状況を見た上で、現存する比較的早期のテキストである南宋・元の諸本における収録状況を確認する。

陶澍本のおおまかな編次は以下の通りである。

卷一	四言詩
卷二～卷四	五言詩
卷五	賦 辞
卷六	記 伝 述 賛
卷七	疏 祭文
卷八	五孝伝
卷九	集聖賢群輔録上
卷十	集聖賢群輔録下 諸本評陶彙集

「桃花源記」は卷六(記伝述賛)に収められており、「記」が先に、「詩」が後に配置されている⁽⁴⁾。同巻に収められている作品としては、他に「晋故征西大将军長史孟府君伝」、「五柳先生伝」、「読史述九章」、「扇上画賛」、「尚長禽慶賛」がある。このうち、記・伝は散文、述・賛は韻文であり、散文と韻文とが混合した構成になっているが、この巻には「桃花源詩」を除けば他に五言詩はない。五言詩は巻二から巻四に収録されている。

以上の収録状況から窺える「桃花源記」「桃花源詩」に関する編集方針は、あくまでも「記」に重きを置くものと言えよう。同時に、「詩」を「記」から独立させることはできないと考えられていたことも窺い知ることができる。

このことは、序文を有する他の五言詩が、いずれも詩に重きが置かれ、巻二から巻四までに収録されていることと好対照を成す。例えば「形影神并序」「九日閒居并序」は巻二、「飲酒二十首并序」は巻三に収録されている⁽⁵⁾。これに対して、「桃花源詩」が巻二・巻三・巻四から隔離されて巻六に収められていることは、「記」・「詩」がこれらの詩・序と同列に扱うことのできないものである、と考えられていたことを意味するであろう。したがって、底本の編集という観点からは、「記」を「詩」の序文と見なすことは困難である⁽⁶⁾。

底本の他、本稿で参照した陶淵明のテキストと「桃花源記」「桃花源詩」の収録状況とは、以下の通りである。

1. 汲古閣本『陶淵明集』

(中国国家図書館蔵 宋刻遞修本影印。2003年、北京図書館出版社[現 国家図書館出版社])

このテキストは底本が校訂に用いたもののひとつであり、その編次は底本とほぼ共通している。「桃花源記」は巻六に収められており、同巻所収の作品も前述の底本のものと同じで

ある。題名は「桃花源記并詩」に作り、「記」を先とし「詩」を後とする。

2. 曾集本『宋刻本陶淵明詩一卷雜文一卷』
(中国国家図書館蔵 南宋紹熙三年〔1192〕曾集刻本影印。2017年、文物出版社)

このテキストは、詩一卷、雜文一卷から成る。「桃花源記」は、題名を「桃花源記并詩」に作り、雜文卷に収録される。「記」を先とし「詩」を後とする。

3. 湯漢注本『陶靖節先生詩註』
(中国国家図書館蔵 南宋淳祐元年〔1241〕湯漢刻本影印⁽⁷⁾。2003年、北京図書館出版社〔現国家図書館出版社〕)

このテキストは陶淵明の詩のみを編集したものである。全四巻のうち、巻四の末に「桃花源記并詩」、「帰去来兮辞」の順に収録される。題名は「桃花源記并詩」に作り、「記」を先とし「詩」を後とする。なお、その後は偽作と目される作品を含めた補遺と言うべき編次となっている。このような編集状況からすれば、「桃花源記并詩」は、他の四言詩・五言詩の後に置くべき、副次的な作品として位置づけられていると考えられる。

4. 李公煥本『箋注陶淵明集』
(上海涵芬樓旧蔵 元刊本影印。商務印書館『四部叢刊』初編)

このテキストは巻一から巻四に四言詩・五言詩が収録される。桃花源記は、「帰去来兮辞」、「五柳先生伝」、「晋故西征大將軍長史孟府君伝」、「読史述九章」とともに巻五に収録される。この巻も韻文・散文が混在しているが、詩とは区別されていると言えよう。「桃花源記」の題名は「桃花源記并詩」に作り、「記」を先とし「詩」を後とする。

以上の諸本を検討してみても、「桃花源詩」は一般の四言詩・五言詩群の中に混入される事例はなく、題名や配置順も含めて、底本の収録状況と大きく変わるところはないように見受けられる。してみれば、「桃花源記」「桃花源詩」両者の関係は、「記」が「詩」に優先するものであると同時に、両者は分かちがたく結びついた作品と見なされていたと言えよう。

三. 本文から見た「記」と「詩」との関係

ここでは、まず「記」の全文を挙げ、次いで「詩」を追いながら、「記」の内容との関連について分析を行いたい⁽⁸⁾。「記」「詩」ともに、内容のまとまりごとに段落を分けた。

晋太元中、武陵人捕魚為業。緣溪行、忘路之

遠近。忽逢桃花林。夾岸數百步、中無雜樹、芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚異之、復前行、欲窮其林。林盡水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光。便捨船從口入。初極狹、纔通人。復行數十步、豁然開朗。

晋の太元中、武陵の人 魚を捕るを業と為す。溪に縁りて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢ふ。岸を夾むこと數百步、中に雜樹無く、芳華 鮮美にして、落英 繽紛たり。漁人 甚だこれを異とし、復た前み行きて、其の林を窮めんと欲す。林 水源に尽き、便ち一山を得たり。山に小口有り、髣髴として光有るが若し。便ち船を捨てて口從り入る。初めは極めて狹く、纔に人を通ずるのみ。復た行くこと數十步、豁然として開朗なり。

(第一段落)

晋の太元年間の頃、武陵に魚をとることを生業とする者がいた。谷川に沿ってさかのぼり、どれほど進んできたかわからなくなったところ、ふと気づくと桃の花咲く林に迷いこんでいた。谷川をはさんで兩岸數百步にわたり、桃の他に木はなく、かぐわしい桃の花が鮮やかに咲きほこり、散る花びらはひらひらと乱れ飛んでいる。漁師はめずらしやと思い、さらに進んで、その林を奥まで行こうとした。桃の林は谷川の源までであり、その先には山があった。山には小さな洞窟があり、そこからかすかに光が差しているように見える。そこで彼は船を置いて洞窟に入った。はじめはとても狭く、かろうじて一人くぐれるほどであったが、さらに數十步進むと、ぱっと目の前が開けて明るくなった。(第一段落)

土地平曠、屋舍儼然、有良田美池桑竹之属。阡陌交通、鷄犬相聞。其中往来種作男女衣著、悉如外人。黃髮垂髻、並怡然自樂。

土地 平曠に、屋舍 儼然として、良田美池桑竹の属ひ有り。阡陌 交り通じ、鷄犬 相ひ聞ゆ。其の中に往来し種作する男女の衣著は、悉ごとく外人の如し。黃髮垂髻、並に怡然として自ら楽しむ。(第二段落)

土地は平坦でどこまでも広がり、家々は整然と建てられ、豊かな田畑や美しい池があり、桑や竹などが生えている。あぜ道が縦横に交わり、鷄や犬の声が聞こえる。そこに行き来して種まきしたり耕したりしている男女の服装は、外部の人と同じようである。白髪の高齢者もおさげの子どもも、みな楽しそうであつ

た。

(第二段落)

見漁人、乃大驚、問所從來。具答之、便要還家。設酒殺鷄作食。村中聞有此人、咸來問訊。自云「先世避秦時亂、率妻子邑人來此絕境、不復出焉。遂與外人間隔」。問「今是何世」。乃不知有漢、無論魏晉。此人一一為具言所聞、皆歎惋。余人各復延至其家、皆出酒食。停數日、辞去。此中人語云「不足為外人道也」。

漁人を見て、乃ち大いに驚き、従りて来たる所を問ふ。具にこれに答ふ。便ち要へて家に還り、酒を設け鷄を殺して食を作る。村中此の人あるを聞き、咸な来たりて問訊す。自ら云ふ「先世 秦時の亂を避け、妻子邑人を率いて此の絶境に来たり、復た焉より出でず。遂に外人と間隔す」と。問ふ「今は是れ何れの世か」と。乃ち漢有るを知らず、魏晉を論ずる無し。此の人 一一為に具に聞く所を言へば、皆な歎惋す。余人 各おの復た延きて其の家に至り、皆な酒食を出だす。停まること数日にして辞去す。此の中の人 語げて云ふ「外人の為に道ふに足らず」と。(第三段落)

ある者が漁師を目にとめ、そこではじめて大変に驚き、どこから来たのかと尋ねた。漁師はこまかく事の次第を答えた。すると、その人は漁師を家に誘って帰り、酒をととのえ、鷄をつぶしてもてなした。村では、このような人がいることを耳にして、皆うちつれて挨拶にやって来た。彼ら自身が言うには、「我らの先祖は、秦の世の戦亂を避け、妻子や村人を連れて、この人跡未踏の地に来て、以来ここから出ませんでした。そのまま外の人と隔離されたのです」とのこと。そして「今は何という時代なのですか」ときく。なんと漢という時代があったことも知らず、まして魏や晋のことは言うまでもなく知らない。この漁師は、いちいち自分の聞き及んでいることをこまかく説明してやると、皆は感に堪えぬようにため息をもらした。他の人々もそれぞれ漁師を招いて家に連れて行き、酒や食事を出してもてなした。漁師は数日とどまった後でいとまごいをした。この村の人々は「外の人には何もお話しなさらないように」と告げた。(第三段落)

既出、得其船、便扶向路、处处誌之。及郡下、詣太守、説如此。太守即遣人随其往、尋向所誌、遂迷不復得路。南陽劉子驥、高尚士也。聞之欣

然規往。未果、尋病終。後遂無問津者。

既に出で、其の船を得て、便ち向の路に扶り、处处にこれを誌す。郡下に及び、太守に詣り、説くこと此くの如し。太守 即ち人を遣はして其の往くに随ひ、向に誌す所を尋ねしむるも、遂に迷ひて復た路を得ず。南陽の劉子驥は、高尚の士なり。これを聞きて欣然として往かんことを規るも、未だ果さず、尋いで病みて終る。後ち遂に津を問ふ者無し。

(第四段落)

そこを出た後で、漁師は自分の船を見つけると、もと来た道をたどって戻ったが、あちこちに目印をつけておいた。武陵郡のまちに着くと、太守のもとに参上し、このようなことがあったと話した。太守はすぐに部下に命じて、漁師のあとについて行かせ、さきにつけた目印を辿らせたが、そのまま迷ってしまつて道を見つけることはできなかった。南陽の劉子驥は、高潔な人であった。この話を聞くとうれしそうに出かけようとしたが、まだ実現しないうちに、まもなく病気で死んでしまった。その後、村を探そうとする者はいなくなった。(第四段落)

以上が「記」の全文である。次に「詩」について見てゆく。

- | | |
|---------|-------------|
| 1 嬴氏乱天紀 | 嬴氏 天紀を乱し |
| 2 賢者避其世 | 賢者 其の世を避く |
| 3 黄綺之商山 | 黄綺 商山に之き |
| 4 伊人亦云逝 | 伊の人 亦た云に逝く |
| 5 往跡浸復湮 | 往きし跡は浸く復た湮れ |
| 6 来径遂蕪廢 | 来たれる径も遂に蕪廢す |

むかし秦の始皇帝が平和を乱し、賢者たちはその乱れた世を避けた。夏黄公や綺里季は商山に向かい、この人々もまた逃れた。彼らが歩んだ足跡は次第に埋もれ、彼らを通ってきた道はそのまま荒れ果ててしまった。

(第一段落)

冒頭の一段は、そのむかし秦の頃に戦亂を避けて移住した、という「記」の村人の語りと呼応する内容である。「嬴氏」は秦室の姓。ここでは特に始皇帝嬴政を指す。また「黄綺」は、秦末漢初の隠者である商山の四皓(夏黄公・綺里季・東園公・甬里先生)を言う⁽⁹⁾。

ここで注目されるのは、第4句の「伊の人 亦た云に逝く」における「伊の人」という語である。これが桃花源の村の祖先に当たる人々を指すことは、「記」の「先世 秦時の亂を避け、妻子邑人を率いて此の絶境に来たり」(第三段落)という内容を知っ

ていて、はじめて容易に理解できるものである。もしも「記」の内容が未知であれば、それが誰を指すのか、「詩」の記述のみでは不明瞭である。このことは、「記」が先に読まれることを想定して製作されたことを示唆するものであって、前節で述べた作品の配列とも照応する。

第5～6句は、俗世との繋がりが断たれたことを言う。外界から見れば、彼らは商山の四皓と同様に忽然と姿を消したかに見える。ここまでが桃花源の村の由来を語るプロローグであり、次に本編とも言うべき村の生活が、第7～24句に涉って描かれる。

- | | |
|----------|--|
| 7 相命肆農耕 | 相 ^あ ひ命 ^{めい} じて農耕 ^{つと} に肆 ^め |
| 8 日入従所憩 | 日 ^い 入りて憩 ^{いこ} ふ所に従 ^{したが} ふ |
| 9 桑竹垂余蔭 | 桑竹 ^{そうちく} 余 ^あ 蔭 ^{かげ} を垂 ^う れ |
| 10 菽稷隨時芸 | 菽 ^{しゆく} 稷 ^{ぎく} 時 ^{とき} に随 ^{したが} ひて芸 ^う う |
| 11 春蚕収長糸 | 春 ^{はる} 蚕 ^さ 長 ^{なが} 糸 ^{いと} を収 ^と め |
| 12 秋熟靡王税 | 秋 ^{あき} 熟 ^{じく} 靡 ^な 王 ^わ 税 ^{ぜい} し |
| 13 荒路曖交通 | 荒 ^あ 路 ^ろ 曖 ^{あい} として交 ^か はり通 ^と じ |
| 14 鶏犬互鳴吠 | 鶏 ^{けい} 犬 ^{けん} 互 ^た ひに鳴 ^な 吠 ^{はい} す |
| 15 俎豆猶古法 | 俎 ^そ 豆 ^{とう} 猶 ^{なほ} 古 ^こ 法 ^{ぽう} にして |
| 16 衣裳無新製 | 衣 ^い 裳 ^{しょう} 無 ^な 新 ^{しん} 製 ^{せい} 無 ^な し |
| 17 童孺縦行歌 | 童 ^{どう} 孺 ^{にょ} 縦 ^{たのほし} に ^い 行く ^{ゆく} ゆ ^う く歌 ^か ひ |
| 18 斑白飲游詣 | 斑 ^{たの} 白 ^{はく} 飲 ^{あそ} しみつ ^つ つ遊 ^{いた} び詣 ^ぎ る |
| 19 草榮識節和 | 草 ^{くさ} 榮 ^え て節 ^{せつ} の和 ^わ ぐを識 ^し り |
| 20 木衰知風厲 | 木 ^き 衰 ^{おとろ} へて風 ^{ふう} の厲 ^{つめた} きを知る |
| 21 雖無紀歷志 | 雖 ^{いへど} 無 ^な 紀 ^き 歷 ^{れき} 志 ^し |
| 22 四時自成歲 | 四 ^よ 時 ^じ 自 ^{おのづか} ら歲 ^{さい} を成 ^な す |
| 23 怡然有余樂 | 怡 ^{ゆた} 然 ^た として余 ^{あま} かなる樂 ^{たのし} み有 ^あ り |
| 24 于何勞智慧 | 何 ^{なん} に ^お 于 ^お いてか智 ^ち 慧 ^え を勞 ^{らう} さん |

たがいに声をかけあって農耕にはげみ、日が沈むと思ひ思ひに休憩する。桑や竹はよく育って大きな木陰をつくり、豆や粟は季節に応じて植ええられる。春のカイコからは長い生糸がとれ、秋の収穫には天子さまへの年貢がかからない。草深い道は見え隠れしながら縦横に行きかい、鶏や犬はそれぞれ鳴いたり吠えたりしている。儀式や食事の器は昔ながらのものを使い、衣服も新しい意匠のものは無い。子どもたちは自由に遊び歌い、老人たちは楽しげに訪ねあう。草木が花を咲かせると気候が穏やかになることをさと、木々が枯れると風が冷たくなることを知る。暦は無くとも、四季はめぐる。ここは安らかでたくさんの楽しみがあるのだから、どうして小賢しい知恵を働かせる必要があるだろうか。

(第二段落)

第7～8句「相^あひ命^{めい}じて農耕^{つと}に肆^め、日^い入りて憩^{いこ}ふ所に従^{したが}ふ」は、村人の一日の生活リズムを述べ

たものである。「記」はたまたま村を訪問した「漁人」が目にした部分のみを切り取ったものに過ぎないため、「其の中に往来し種作する男女」(第二段落)という形で、その労働の一コマが描かれる。しかし、「詩」では「たがいに声をかけあって農耕にはげみ、日が沈むと思ひ思ひに休憩する」という村人の日常にまで踏み込んで描写している。

第9～10句以降は、村の風景が描かれる。「記」においては、「桑竹の属」(第二段落)の存在には触れられているが、それがどのような様子であるかについては述べられていない。同じく、「良田」(第二段落)の記述はあっても、そこにどのような作物が植えられているかについては、省略されている。第9～10句の「桑竹」が豊かに生い茂り、「良田」には時期に合わせた豆やキビが栽培されるという描写は、その点を補完するものである。

また、「桑」があるということは、養蚕が行われていることを意味する。このことも「記」には言及がないが、当然想像される産業である。第11句「春蚕長糸を収め」は、その点を補ったものである。なお、それに続く第12句「秋熟王税靡し」は、しばしば国家による収奪を批判する句として取り上げられる⁽¹⁰⁾。

確かに、この句に社会批判の側面は認められてよいであろう。しかしその一方で、この句が描く収穫の喜びという側面もまた無視してはならない、と筆者は考える。なぜならば、対句を構成する「春蚕収長糸」句が生糸の豊富な収穫について述べているためである。このことから考えれば、「秋熟靡王税」句も、穀物の収穫が税によって減少することなく、そのまま自分たちのものとなる喜びを詠ったものと考えられる。

第15～16句「俎豆猶ほ古法にして、衣裳新製無し」では、村の人々の衣服や調度品が古式ゆかしいものであったことを言う⁽¹¹⁾。「記」には、「男女の衣著は、悉ごとく外人の如し」(第二段落)とあるが、これは外界との類似を指摘したものに過ぎない。第15～16句は「俎豆」「衣裳」に代表させながら、村人の生活全般が古い様式を守っていることを示唆するものである。

第17～18句「童孺縦^{たのほし}に^い行く^{ゆく}ゆ^うく歌^かひ、斑^{たの}白^{はく}飲^{あそ}しみつ^つつ遊^{いた}び詣^ぎる」では、子どもたちが思いのままに走り歌い、老人が楽しげに歩き訪ねあう様子が描かれる。「記」では、「黃髮垂髻、並に怡然として自ら楽しむ」(第二段落)とのみあったが、「詩」では彼らの具体的な行動が想像されているのである。

第21句「紀歴の志無し」については、歴代の王朝によって整備されてきた暦を持たない、ということ

によって、桃花源の村が国家による支配を免れた世界であることを示している可能性が考えられる⁽¹²⁾。しかし、その前後の第19～22句を見ると、暦を持たなくとも草花や樹木の盛衰によって四季の運行を知ることができる、とある。原始的ではあるが、自然物によって季節を知ることができれば村人にとっては充分なのであって、国家による支配とは無関係に、この村の自給自足体制は順調に機能しているのである。それが、結果的に国家支配に対する批判という側面を持つことはあり得るであろうが、同時に、この村の素朴ではあるが充実した生活を描こうとするものであることも忘れてはならないであろう。

そして、かかる素朴な生活であるために、「詩」は次の第23～24句「怡然として余かなる楽しみ有り、何に于いてか智慧を労はさん」へと繋げられてゆくのである。

桃花源の村が『老子』の「小国寡民」のイメージと重なりあうことは、しばしば指摘されるところである。『老子』八十章「鶏犬之声相聞（鶏犬の声 相ひ聞ゆ）」は、「記」の「阡陌 交り通じ、鶏犬 相ひ聞ゆ」や「詩」の第14句「荒路 暖として交はり通じ、鶏犬 互ひに鳴吠す」に踏襲されている。これらの句はイメージを共有することによって、『老子』の世界を髣髴とさせる効果をあげている。

第24句の「智慧」も同じく『老子』十八章の「大道廢，有仁義。智慧出，有大偽（大道 廢れて，仁義有り。智慧 出でて，大偽有り）」を踏まえたものである。これは『老子』の思想——特にその逆説的な論理を「詩」に織り込んだものと言えよう。智慧の発達は、かえって欺瞞や詐偽の横行を招く危険をはらんでいるが、かの「小国寡民」のような素朴な生活を楽しんでいる桃花源の村では、そうした小賢しさは無用なのである。

「記」においては、とりたてて村人の淳朴さが述べられることはなく、ただ「漁人」の狡猾さが際立つことによって、相対的に淳朴に感じられる程度に過ぎなかった。村人は「漁人」を歓待し、別れに際して村の存在を他言しないように依頼した（第三段落）。しかし、「漁人」はその帰る途上で、再訪を見越して目印をつけておいたという（第四段落）。この行動は、用意周到とも言えるが、また狡知とも言えるべきものである。このように考えると、第23～24句「怡然として余かなる楽しみ有り、何に于いてか智慧を労はさん」は、「漁人」の「智慧」に対する批判にもなっていると言えよう。

- 25 奇蹤隠五百 奇蹤 隠ること五百
 26 一朝敵神界 一朝 神界 敵る
 27 淳薄既異源 淳薄 既に源を異にし

- 28 旋復還幽蔽 旋ちにして復た幽蔽に還る
 29 借問游方士 借問す 游方の士
 30 焉測塵器外 焉んぞ測らん 塵器の外を
 31 願言躡輕風 願はくは言に輕風を躡み
 32 高挙尋吾契 高く挙がりて吾が契を尋ねん

この奇しき人々の足跡が隠されてから五百年、ある日、その不思議な村が姿を現した。しかし、村人の淳朴さと俗世の人の輕薄さとはもはや根本的に異なるものであり、彼らはたちまちのうちにまた隠れてしまった。さてお聞きしたい、この世の中にいる人々よ。汚くうるさい俗世の外の世界をどのようにして測り知るのか。願わくは疾風に乗り、空高く飛んで私の心にかなうあの人々を訪ねたいものだ。（第三段落）

第25～28句の「奇蹤 隠ること五百、一朝 神界 敵る。淳薄 既に源を異にし、旋ちにして復た幽蔽に還る」は、「漁人」による村の発見や村人との交流、裏切り、再訪不能となる結末といった「記」の内容を知っていることによって、はじめて理解できるものである。

「記」に拠れば、秦の戦乱から避難して以来、「遂に外人と間隔す」とあり、また「漢有るを知らず、魏晉を論ずる無し」（第三段落）とあるように、村は数百年に涉って外界と隔離されていたという（「奇蹤 隠ること五百」）。この村が外界と接点を持ったのは、他ならぬ「漁人」が村を訪れたためである（「一朝 神界 敵る」）。しかし、淳朴な村人に対して、外界の人間はあまりにも輕薄であった。これは前述の「漁人」の行動に端的に表れている（「淳薄 既に源を異にし」）。そのため、「記」に「向に誌す所を尋ねしむるも、遂に迷ひて復た路を得ず」（第四段落）とあるように、桃花源の村に行くことはできなくなったのである（「旋ちにして復た幽蔽に還る」）。このように見てくると、第25～28句は、あたかも「記」のあらすじを追うような構成になっていると言えよう。

なお、「桃花源記」を教材とした場合に、「なぜ桃花源の村が再訪不能となったのか」とは、しばしば問われるところである。「詩」は他ならぬ作者陶淵明の見解を表すものであって、この箇所は回答の重要な根拠となるように思われる⁽¹³⁾。

かくて「詩」は「願はくは言に輕風を躡み、高く挙がりて吾が契を尋ねん」と結ばれる。

風に乗ることは神仙のなせるわざとして知られている。『莊子』逍遙遊篇に「夫列子御風而行，泠然善也（夫の列子は風を御して行き，泠然として善きなり）」とあり、また『列仙伝』馬丹伝に「有迅風

発屋、丹入回風中而去（迅風 屋に発する有り、丹回風の中に入りて去る）」とあるのは、その例である。しかし、桃花源の世界がいわゆる仙界でないことは、既に宋人によって指摘されているところである⁽¹⁴⁾。そこで想起されるのは、陶淵明の次の詩である。

「連雨独飲」（卷三）

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 1 運生会帰尽 | 運生 ^{かなら} 会ず尽くるに帰す |
| 2 終古謂之然 | 終古 これを然りと謂ふ |
| 3 世間有松喬 | 世間に松喬有りとは |
| 4 於今定何間 | 今に於て定めて何れの間ぞ |
| 5 故老贈余酒 | 故老 余れに酒を贈り |
| 6 乃言飲得仙 | 乃ち言ふ 飲まば仙を得んと |
| 7 試酌百情遠 | 試みに酌めば 百情 遠く |
| 8 重觴忽忘天 | 觴 ^{さかづき} を重ぬれば 忽ち天を忘る |
| 9 天豈去此哉 | 天 豈に此を去らん哉 |
| 10 任真無所先 | 真に任せて先んずる所無し |
| 11 雲鶴有奇翼 | 雲鶴 奇翼有り |
| 12 八表須臾還 | 八表 須臾にして還らん |

生命が必ず尽きることは、昔からそのとおりだと言われている。世の中には不老長寿の赤松子・王子喬という仙人がいるというのが、今、どこにいるというのか。長老が私に酒を贈ってくれたが、なんと「これを飲めば仙人になれる」と言う。試しに飲んでみると様々な思いが遠くのように感じられ、酒杯を重ねるたびに天を忘れるような心地となった。本当の天もこの心地と変わるところはないだろう。あるがままに任せてしまっ先を争うこともするまい。雲間を飛ぶ鶴には優れた翼があり、世界の果てまでもわずかの間に飛びめぐらる。

作者陶淵明が神仙思想に否定的であることは、冒頭から窺うことができる。彼は長老から仙人になれるという酒をもらうのであるが、もちろん仙人になれるとは考えていない。ただ、その酔い心地が、仙人と同様に、天に昇ったかのようにであると詠う。鶴もまた仙人が乗るものとして知られているが、神仙を否定する作者が鶴に乗ることを望むとは考えにくい。「雲鶴 奇翼有り、八表 須臾にして還らん」とは、酔いの中で自在に飛ぶような感覚を味わうということであろう。つまり、空想の中での飛翔である。

「記」では、太守のみならず、隠者として知られる「南陽の劉子驥」（第四段落）も桃花源の村に行くことができなかったという⁽¹⁵⁾。また「詩」にも「旋^{たちま}ちにして復た幽蔽に還る」とあって、村への道が断たれたことは作者自身が言及していることである。また、桃花源の村は仙界ではないため、仙人となることによって到達できるものとも思われない。

だとすれば、「願はくは言^{こと}に輕風を躡^ふみ、高く挙がりて吾が契を尋ねん」とは、「連雨独飲」詩の場合と同様に、空想の世界で桃花源の村に遊ぶことを望んだ発言と考えられる。

四. おわりに

これまで見てきたところに拠れば、「詩」は「記」に基づきながらも、推測や想像を交えて桃花源の豊かな日常生活を描くものであった。作者陶淵明は空想によってそこに遊ぶことを望むのであるが、その空想は既に「詩」の中で展開されていたのである。

以上のような内容を持つ「詩」が「記」を抜きにしては成り立たない性質のものであることは言うまでもない。一方、「記」もまた空想の素材として「詩」との関係結んでいると考えられる。それは、「詩」を介在させることによってはじめて明らかになる「記」の新たな側面である。筆者は、この点に「桃花源詩」を援用する意義があると考えたものである。

次には、「詩」を援用することが「桃花源記」の読解にどのように寄与するのか、について検討しなければならないのであるが、この問題については、別稿を用意したい。

注

- (1) 本稿で参照した教科書は、以下の通りである。
 - 三省堂『高等学校国語総合 古典編改訂版』（2016年3月検定済2017年3月）
 - 第一学習社『高等学校改訂版新訂国語総合 古典編』（2016年3月検定済2017年2月）
 - 明治書院『新精選国語総合 古典編』（2016年3月検定済2017年1月）
 - 教育出版『精選古典B漢文編』（2017年2月検定済2018年1月）
 - 桐原書店『新探求古典B漢文編』（2017年2月検定済2018年2月）
 - 数研出版『改訂版古典B漢文編』（2017年2月検定済2018年1月）
 - 大修館書店『古典B改訂版漢文編』（2017年2月検定済2018年4月）
 - 筑摩書房『古典B漢文編改訂版』（2017年2月検定済2018年1月）
 - 東京書籍『精選古典B漢文編』（2017年2月検定済2018年2月）
- (2) 陶淵明の別集（個人詩文集）では、「桃花源記」と「桃花源詩」とは一揃いのものとして収録されている。本稿第二節で詳説する。
- (3) 「桃花源記」が、当時の洞天思想や洞窟探訪説話に基づいたものとする見方については、三浦國

- 雄『中国人のトポス——洞窟・風水・壺中天』（平凡社選書127, 1988年, 平凡社。「洞天福地小論」〔洞底湖と洞底山〕, 内山知也「シンポジウム『桃花源記』について」〔『新しい漢文教育』10号, 1990年〕, 同氏『『桃花源記』の構造と洞天思想〕〔『大東文化大学漢学会誌』30号, 1991年〕を参照。また, 「桃花源記」と洞窟探訪説話との相違点については, 門脇廣文『洞窟の中の田園 そして二つの「桃花源記」〕(2017年, 研文出版。「洞窟の中の世界」)を参照。
- (4) なお, 底本では「桃花源記」の題名を「桃花源記并序」(傍点, 筆者)に作るが, 後に見るように諸本は全て「并詩」に作っている。
- (5) 序を有する詩は他にもあるが, ここでは省略する。
- (6) 田部井文雄・上田武『陶淵明集全釈』(2001年, 明治書院。p.331「補説」)では, 「桃花源詩并記」に作るテキストが明清の詩中心の選集を踏襲した可能性や, そのことが「記」を「詩」の序文と見なす結果につながることの非について指摘している。
- (7) このテキストの刊行年は南宋淳祐元年(1241)とされているが, 松岡榮志「続『陶淵明集』版本小識——宋・元版二種」〔『漢文教室』173号, 1992年11月〕に, 南宋咸淳元年(1265)の誤りであることが指摘されている。
- (8) 旧漢字体は常用漢字体に改めた。書き下し文, 現代語訳は拙訳による。
- (9) 商山の四皓は『史記』留侯世家に登場するが, 彼らが秦の頃に隠遁したことについては, 直接触れられていない。隠遁の時期や場所については, 皇甫謐『高士伝』に「秦始皇時, 見秦政虐, 乃退入藍田山。(中略)乃共入商雒, 隱地肺山, 以待天下定(秦始皇の時, 秦の政の虐^{むご}きを見, 乃ち退きて藍田山に入る。(中略)乃ち共に商雒に入り, 地肺山に隠れ, 以て天下の定まるを待つ)」とあり, また『太平御覧』巻168(州郡部十四・山南道下・商州)に引く皇甫謐『帝王世紀』に「四皓始皇時隱於商山(四皓は始皇の時 商山に隠る)」とある。「桃花源詩」が基づいたものとしては, これらのような記事が考えられる。ちなみに, 陶淵明「集聖賢群輔録上」にも「当秦之末, 俱隱上洛商山(秦の末に当たり, 俱に上洛の商山に隠る)」とある。但し, 「集聖賢群輔録」には偽作の疑いもあるため,

ここでは附記するにとどめる。

- (10) 一海知義『陶淵明—虚構の詩人—』(岩波新書505, 1997年, 岩波書店。pp.34-38)では, 「詩」の「秋熟 王税^な靡し」の句を取り上げて, 桃花源の村が徴税を拒否していることを指摘し, そこに階級のない社会へのあこがれを見出している。
- (11) ここは「記」の「外人」の解釈に関わるところであるが, 「外人」解釈の問題は, 本稿の論旨とは直接関係しないため, 触れないこととする。
- (12) 暦は, 王朝が天命を受けて成立するという受命の考え方と深く結びついており, 王朝の正統性を主張するために暦法を改めることが行われてきた。「奉朔(暦を採用する意)」という語が臣従を意味するように, ここでの暦への言及も国家による支配との関係(この場合は関わりがないということ)を表そうとしたことが考えられる。
- (13) 現行の教科書では, 明治書院『新精選国語総合 古典編』(2016年3月検定済2017年1月)「桃花源記」研究3(p.145)に「後日, 他の人々が, 桃花源の村に到達できなかったのはなぜか, 話合ってみよう」とある。また, 大修館書店『古典B改訂版漢文編』(2017年2月検定済2018年4月)「桃花源記」学習のポイント2(p.50)の「なぜ村への行き方を尋ねる人がいなくなったのか, 考えてみよう」という問題についても, 桃花源の村人と外界の人々との相違点が関係してくると考えられるため, 「詩」のこの箇所は参考に価すると思われる。
- (14) 「記」には「酒を設け鶏を殺して食を作る」(第三段落)とあるが, このことについて, 蘇軾は「又云殺鶏作食。豈有仙而殺者乎(又た云ふ鶏を殺して食を作ると。豈に仙にして殺す者有らんや)」と言う(『東坡和陶詩』「和桃花源詩」)。確かに, 鶏を殺してその肉を食らうことは, 仙人の行動として考えにくい。
- (15) 劉子驥は『晋書』隱逸伝に「劉驥之, 字子驥, 南陽人(劉驥之, 字は子驥, 南陽の人なり)」とあるように, 実在の人物である。「記」においては, 俗世と隔絶された村の話聞いて「欣然」としたとあるように, 高潔な隱者として描かれている。

謝辞

本稿は日本学術振興会の科学研究費補助金(20K02886)による研究成果の一部である。